

「就労支援」意見交換会～《働きたいを支える》とは～

開催日時：2019年1月31日（木）16時～18時

開催会場：堺市健康福祉プラザ 4F プレサポートルーム

1. 開会あいさつ

堺市障害者就業・生活支援センター「エマリス堺」

松林センター長

⇒本日の主旨として、堺市の就労支援ネットワークの点は増えてきたが、まだ線にはなっていないことも感じられる。ニーズが多様化する中、私たち支援者も再度互いを知り、つながっていく必要がある。支援者・当事者から見て現状使いやすい連携となっているのか等、共通言語含め整理をしていきたい。

2. 自立支援協議会・就労支援WT（2016～17年）より（報告者：林氏）

- ・ 自立支援法施行後、社会資源も就職者も大幅に増加
- ・ 近年、障害のある人のニーズが多様化、「働く環境」も大きく変化
- ・ 就労支援は単独ではできない（個々のニーズや状態は様々、働き続けるための支援）
- ・ 本人の「働きたい」という声を支援者が大事に温め、繋いでいくことが大切
- ・ 「障害者が社会の中で働く意義・価値」を共有できる幅広いネットワークづくり
- ・ 支援者間の情報交換や専門性の向上、当事者への分かりやすい情報の発信

3. 各分野・ネットワークより

- ・ 「これまで積み重ねてきた支援や活動」「これから目指したいこと（課題）」

○堺市就労移行支援事業連絡会（報告者：パル・茅渟の里 大口氏）

⇒平成20年に立ち上げ 任意団体

立ち上げ時、堺市・就ポツ・複数の事業所が協力し立ち上がることとなる

現在、堺市内に就労移行は26事業所。内16事業所が加盟している。

会としての取り組みは、

例会：2ヵ月に1回

フェスティバル：就職1年目・5年目・10年目の方への表彰式を開催

5年間行っており、今年度から10年目の方の表彰を実施

研修：スタッフの研鑽のために開催 年数回実施。

今回、定着支援事業についての意見交換会も実施。

説明会：パネル展と個別ブース対応を行い、事業周知の意味も含め実施

会を行う中でのメリットは、支援者間の顔の見える関係と情報交換という点は見られるが、課題として、マンネリ化・意見のくみ上げに関しても挙げられる。

○堺市就労継続 A 型協議会（報告者：ともに一しょうりんじ 石野英司氏）

⇒堺市で 4～5 年前に立ち上がる。半数程度の事業所が参加。

2 年で 4 回程度会議を実施。府との取り組みとして、5 回程。

厚労省より講師を招き研修も開催

堺市内の事業所、今年 2～3 件減。現在 19 事業所

大阪府の A 型事業所は 316 事業所あるが、減ってきている

原因としては、改善計画や収支問題あり。サービスの質向上の取り組みが必要

○エール de さかい（報告者：ともに一しょうりんじ 石野強氏）

⇒堺区の団体で構成 63 事業所（多機能型含む法人は 40 団体）

数か月に一度事業所が増えている状態

立ち上げより 9 年目。当初は協議会との共催であったが、4～5 年前より事業所主体に切り替わり、現在は、フェニックスロータリーから協賛金頂き運営

活動は、月一回、堺市とプラザで啓発活動。年 2 回程度イオンでも開催。他には、年 2 回程度交流会と研修会実施

交流会は、職員交流の意味合いで行い、今年度、現場支援員のみ参加の研修会実施

また、エール de のパンフレットを作成し、事業ごとに冊子内を色分けし事業を分かりやすくさせるなども行い、相談事業所と支援学校などに配布

啓発活動は、授産製品を作っている事業所は参加しているが、授産を行っていない事業所の参加は少ないので研修実施として活動を行っている。

○ギャラリーみなみかぜ（報告者：せんぼく障害者作業所 金沢氏）

⇒2008 年に発足し 10 年

現在、福祉のネットワークとして南区役所を拠点に活動

成り立ちは、当事者の声を地域福祉課に届け成り立つ

地域との交流と啓発・工賃向上を通じて、社会と繋がる通過点

2013 年迄は、区役所での月 1 回程度の活動が中心であったが、2013 年以降は、区役所内の交流ひろばをギャラリーの常設拠点となり活動

現在 18 団体で構成

喫茶コーナー等、社会の中で働くことを通して、就職される方も出ている。

他にも、南区協議会とともに冊子づくりや事業所交流会を行っている。

地域連携として、民生委員との研修や消防からの優先調達などの連携を実施

○大阪府立泉北高等支援学校（報告者：増田茂則氏）

⇒生徒は 6 月・8 月に事業所などの実習に行き、その後、事業所へ

今年度 3 月に事業所の合同説明会実施（堺支援では 5 月に実施）

現在の 3 年生 33 名の内、5 名が内定+αで、7 名程度が卒業後就職となる予定

卒業後、GH を利用する予定者が、就職者予定者 1 名+事業所利用者 2 名いるので、現在、区基幹とカンファレンスを行い調整に入っている

1 年 55 名の内 17 名が企業実習、2 年 62 名の内 18 名が企業実習を行い、3 年時の実

習に向けて調整を行っている。親御さんとも一緒に進路について考えていく。

泉北支援の校区は、中・西・南区にお住いの方が対象校区

○株式会社グッドウィルさかい（報告者：古賀氏）

⇒25年前ぐらいに、障害者雇用を進めるために立ち上げ

当初、就ボツからの訓練生の受け皿という形で、1人でも多くの重度の方の就職を進めるため、堺市からの受託業務を行う。

現在、エルチャレンジに組合員として加入している。

課題として、今は『どう退職していくか』（定年含む）という課題が見えてきており、定年後の当事者の繋がり方を模索している。

○視覚・聴覚障害者センター（報告者：楯氏）

⇒仕事の相談は生活相談の一環で受ける形がメイン

コミュニケーション障害から受け入れてくれる事業所を探すことも難しいことがある。繋がっても、コミュニケーションの整理として、就労移行利用時は週一回面談という設定を行うこともある。また、会社の業務の一つとして面談を行うこともある。

対応できる専門機関が少なく、市外のところとも連携をするケースがある。

本人から困っていることの発信が出来る人でも、自身の困りに関して理解しにくいケースもある。そのため、支援に入りにくいことや支援を拒まれることがある。また、入り口の部分で聞き取れない人もおり、その際に、理解におけるズレが生じることがあるので、就労の入口から関わることができればと考えている。

センターとして、会社に入りサポートを行うことが難しい立ち位置でもある。

○堺市難病患者支援センター（報告者：井上氏）

⇒月3回難病患者向けの就労相談会を実施。その際は、HWより難病サポーターが来て対応している。

相談を受ける中で、『A型は楽かな』との声が出るが、実際に内職という求人を見てA型に行くがしんどく続かないこともある。

手帳が取れないことのしんどさ。本人自身がしんどさを伝えにくく、職場の理解を得られにくいことがある。

就職を希望される方の中で、1回の相談で就職されるというパターンと、何度も求人応募するが就職が難しいというパターンの2極化が見られる。

センターとして、産業医が居れば会社への介入も行えることもあるが、そうでない場合は、病状悪化への対応含め企業に入りにくい状態である。この点は視覚聴覚センターと同じである。

○東区基幹相談センター（報告者：御田氏）

⇒就労相談は全体を見ると少ない。働きたいというアセスメントが弱いこともある。

色々な課題の現れがあり、基幹としては生活部分の役割を任せられることが多い。

「定着支援事業」も出てきているので、そのバランスが変わっていくかもしれない。

「働きたい希望」に備えて、何を求められているのか、ニーズの把握や選択肢の提示を行っていく必要がある。そのためにも移行事業所との連携や情報の把握が必要

○総合相談情報センター（報告者：濱氏）

⇒市の協議会運営補助・研修情報発信・相談支援員研修企画運営

情報集約と情報発信の業務を行っており、各区の協議会の声を市の協議会や必要なところに届ける役割がある

堺市の特徴として、当事者と事業所が繋がってから、計画相談が入ること多い。その際の介入の難しいという相談の現場からの声もある。平場での意見の組み上げ、顔の見える関係づくりが必要

○堺市障害者就業・生活支援センター エマリス堺（報告者：館野氏）

⇒ニーズが多様化している。一般に近い方もおられて、障害層の広がりから、専門性が問われている。働き方も様々で、就職希望者の中には、20 時間未満での就業の方もおられる。

本人の自立に向けての力＝自ら発信し解決出来る力をつけてもらうことが必要とも思われる。複数雇用している会社も増えてきている。会社としても継続して支えてもらえるように、それぞれが力をつけていくことも今後必要になる。

障害をクローズで就職されている支援も増えており、支援全般においての偏りも出てきている。

就労継続 A・B 型から就職支援を拾っていく必要がある。支援者が変わることもあるので、どのようにフォローすべきであるかも必要

○生活リハビリテーションセンター（報告者：増田基嘉氏）

⇒中途障害がメイン

就職していて、脳卒中・頭部ダメージから中途障害へ
発症半年以内の方が中心で利用している。

病院も早期退院となり、早期に関わることがあり、復職時は産業医と調整を行う。退院後、一旦仕事に戻るが、二次障害が現れ社会参加が難しく孤立してしまう方もいる。そうした方を改めて就労のステージへつなぐ支援も行っている。

医療と福祉の連携の連携、一旦切れると再度繋がるのに時間がかかる。そうなることばれてしまうので、こぼれないためにしていく必要あり

4. 意見交換

・ 「自分もきっと働ける！」 安心してチャレンジできるために…

○アンダンテ就労ステーション（森氏）

⇒自立支援協議会が見えないと感じることがある。

支援の拠点やネットワークは増えて充実してきた。今は新しい拠点を作るのではなく、質を上げる時期と思われる。

数字での評価以外の就労の質をあげないといけない時期。この度の報酬改定は事業

所にとって大きな衝撃であった。厚労省も数字以外の就労支援の質の基準、評価軸を求めている。

事業者のネットワークは「事業」がベースとなってしまう。「地域」に焦点を当て「堺市の地域課題」からの議論は自立支援協議会の本来の役割ではないか。

堺の『あとから相談支援がつく』という課題であれば、ニーズの裏側にあるものは何かをつかみ事業所にたどり着くまでの支援が問われている。パンフレットを作成したとしても、それがどのように活用されているかが重要

○じょぶライフだいせん（川勝氏）

⇒定着支援が稼働したが、今までの就労の支援員で行っているのもまだ手が回らない利用される当事者の中には自己負担発生しており、支援を求めない方もおり、活用される際の制度的な課題となっている。

また、ニーズ増から多様なニーズの受け入れが出来ていない。

○いずみ（上野氏）

⇒就労移行は連絡会で顔の見える関係はあり、なんとなく見えるが、B型はお付き合いがないと全く分からない。授産（自主製品）をしていないと繋がりが無く余計分からない。

地域力をあげる必要がある。放課後デイから体験実習の受入れもしているが、横の繋がり、共通言語・顔の見える関係をつくることは大切。事業所のスタッフが孤立していることもある。スタッフからどのように繋がるかという相談を受けたこともある。

○プロスパー株式会社（久田氏）

⇒A型は事業収入を上げるということが必要である。福祉的支援と仕事としての比重のバランスも課題であるが、本人の能力を下げるような支援はしたくない。どうしていけばという悩みがある。

仕事を通じてのやりがい、社会の中で役立っている自分、地域との繋がりを感じて自信をつけて、次の就職につながって欲しい。相談支援がついていない人への対応など、生活面の課題はどうしたら良いのかと悩み、結局支援員が夜に動くこともある。

大きな枠で繋がれるところが必要。

○You I ハウス（松坂氏）

⇒一般就労はいない。

エール de さかいの動きとして、相談から上がってくるような困難への対応ではなく、まず「ちょっとした困りごと」に目を向けることが必要

例えば、独居老人のゴミ出しや水やり、犬の散歩など。社協・地域包括と結びつきエール de さかいを窓口、『ちょこっとサービス』に取り組みは始めている。介護サービスで対応できないことの丸投げにならないように気をつけながら、地域との結びつき、必要とされることに重きを置いて取り組んでいきたい。

地域ではじかれがちな当事者の方もいる。一方でB型にはいろんな作業をしている人がいる。受け入れてもらえることに結び付けられるような仕事を探している。『地域で住んでいく』その為に、やりがい・人に必要とされることから、自信をつけてもらえればと思う。一般就労以外の「働く意味」も大事にしていきたい

○総合相談情報センター（福井氏）

⇒協議会が見えないという意見に課題があるのかと思われた。

来年度は区協議会にも参加して地域の声を確認していきたい。

○堺市障害者就業・生活支援センター エマリス堺（大内氏）

⇒働くことの意義の検討

就職者数も雇用率も上がり、「俺も働ける」という意識は高まってきている。ニーズも多様化。

支援なく、ハローワークに行き、就職される当事者が増えているように思われる。

既存のやり方とは異なる。エマリスでの関りを検討

就職するが長く続かないことがあり、その先が見えないことがある。

働きたい人がスムーズにサービスにつながる仕組みが必要

○社会福祉法人コスモス（林氏）

⇒作業所の利用者も、施設外での実習に取り組む中で、施設で見ていたのとは違う姿を見せることがある。事業ベース以外の関りが必要

【意見交換追加】

森氏：自立支援協議会で就労課題にどのように取り組んできたのか？

濱氏：就Aの課題が見られた。

相談支援から事業所を知って繋げていく必要が落としどころだったと思う

増田基氏：就労ワーキング。就A・就B・移行と、どうしても事業ベースでの議論になり、当事者のためにという話が弱い。事業所の運営・継続の課題と当事者のために外へ送り出していく支援者の見方、ずれることが多い。

大きくネットワークでつながりながら事業としても回っていくのが理想。

また、協議会は何かをしてくれる場ではない。地域のアセスメントを行っていく課題もあるが、協議会へ提案や発信を投げかけてほしい。サービス管理責任者向けの研修プログラムも見直しも行われている。ぜひ提案してもらいたい。

林氏：自立支援協議会でもようやく就労の話しが挙がってきた。

2年前の就労ワーキングの前は、正直、就労移行に利用者が来ないという事業ベースの問題意識があった。しかし、就労ワーキングを進めるなかで、当事者ベース・地域課題に焦点が移り、緩やかに繋がる場が必要ということで本日の意見交換会を設定

今後、年何回か就労をテーマにした交流や集まりを地域ベースで行い、提案につなげていきたいと考えている。

森氏：意見を投げ込む先を知りたい

濱氏：区の協議会で挙げて頂ければ、運営会議⇒市協議会となる。

まず各区は基幹が窓口となっているが、持ち帰ったあとのフィードバックについての課題は挙がっている。

増田基氏：好循環にしていくために、成功事例を集めようとしている。

相談から事業所につながり就職につながったケース、専門機関のサポートと連携して上手くいった事例など。自立支援協議会では計画相談向けの「サポート事業」も行っている。就労支援の知識や情報も反映できるのではないかと。

松坂氏：「なんかやりたい」とは思うが今は家から出るのがやっと…という人もいる。1つ1つ成功体験をつみ重ねるためにどう支援していくのか？一般就労からは遠い人もいる。働くとは一般就労だけ、あるいは就 B や就 A だけではなく、様々な当事者の活躍の場が必要。ピアサポートなども行っている。

上野氏：「うちで行っている支援は本当に良いのか？」と検証するためにも横のつながりは必要。福祉が良いのか、福祉ではない方が良いのか、当事者にとって何が一番必要であるかを考える必要がある。そのためにも私たち自身が地域の社会資源を知ることが重要。

石野強氏：堺区はセルフプランの方が 200 名いる。

咲かそうネットでは計画相談との顔の見える関係づくりのために名刺交換会を行って利用者がほしいから…ではなく事業所同士のつながり作りのため。相談の人にさらに頑張ってもらいたいとの思いもある。まだまだ繋がりが薄い。何かやらないかとの思いはある。

就労支援には様々な意味がある。自立支援協議会で上がってきた課題を地域で解決していくために、それぞれのネットワークがどう繋げていくのか。繋げていく力が重要。

松林氏：18 年協議会に居るが、今まで就労にはスポットが当たっていなかったが、ようやく集まってきた。

教育や作業所、就労移行や就労継続など様々な社会資源はできてきた。

改めて障害のある人が就労に至るまでのプロセスを見ていくと、地域の各資源が補い合い、連携していくことが必要

ネットワークの難しいところは、どうコーディネートをしていくか。

5. まとめ

堺市障害者自立支援協議会

増田副会長（生活リハビリテーションセンター所長）

⇒『当事者の成功体験』は支援者にとっても大事。どうやったら上手くいくかを考えて行きたい。